

市民も行政も美意識を高め、夜の景観や海辺が綺麗な都市を目指して欲しい。

—— 株式会社松下美紀照明設計事務所 代表取締役 松下美紀氏



松下 美紀(まつした みき)

熊本生まれ。1989年に(株)松下美紀照明設計事務所を設立、現在に至る。

国内及び東アジア諸国などにおいて、環境照明、公共や民間の照明設計、都市の照明計画といった光環境の創出を行う。1999年には福岡タワーのライトアップを手がけ、ポールウォーターベリー特別栄誉賞および照明普及優秀施設賞を受賞。ほか受賞歴、公職多数。

指針に沿って比較的良い形で成長した 25 年

私は照明デザイナーです。会社は 1989 年設立、今年で 23 年目を迎えます。会社を興した理由は、若い頃からまちづくりに強い関心がありましたが、行政とまちづくりに関わるには法人格を持たないと様々な面でやりにくいということに気づいたからです。会社を興した平成元年は IMS やソラリアが建ち、ユニバーシアードが開催される頃で、「福岡はこれから変わる」と TV で識者が言っていた事を覚えています。私自身も、今から挑戦すれば綺麗なまちにできると希望に燃えていました。

1990 年、桑原市政の時に『福岡市都市環境照明ガイドライン (福岡ライトストーリー)』という指針を参画して作りました。この前段にあった『都市環境照明基本計画』という計画をケーススタディとともに具体化したのです。まちは短期間に作るものではなく 10 年単位でできていくと信じているので、照明に関しても長い視野を持つ観点からルールやマニュアルが必要だということで作りました。ガイドラインがあったお蔭で、現在の福岡の照明景観は均整が取れてきていますし、この 20 年前を振り返

っても作っておいて良かったと思います。

当時はこの他にも公共スペースや地区のガイドライン作りに多く携わり、その後の変化も見ているつもりですが、ガイドラインという基礎があったからこそ現状が良くなっていることは事実でしょう。ガイドラインがあれば「福岡市は未来をこのように考えている」とデザイナーがプレゼンテーションに使うこともできますし、市の指針として一定の効力もあるので、酷い景観に繋がりにかねない施設ができそうになった際に「それはダメ」と言える力もあるのです。

5 年スパンで考えつつ 10 年後の世界に対応を

照明の分野はこの 10 年で大きく進化しました。LED や有機 EL 等の素材が登場し、電流を流して点灯するアナログなものからデジタルの世界へのシフトが進んでいます。公園や街区の照明で電力消費量が一昔前の 50 分の 1 程度になった事例もあります。照明を点ける際も、スイッチを押すのではなく、音声に反応して明るくなったり暗くなったりするものが既に見られますが、今後はそうしたものが都市の中に

も広がっていくでしょう。

先程述べた照明ガイドラインを作る際「10年後はどうなるか分からないね」と言っていたのですが、10年ではあまり変化がありませんでした。しかし20年経つと大きく変化しました。時の流れの加速度を加味すると、将来5年後はあまり変化がないかもしれないけれど、10年経つと大きな変化が起きると思うのです。ですから、新ビジョンは見通しの立てやすい5年スパンで考えつつ、10年後に対応できるものを作っていく必要があるのではないのでしょうか。

こうしたスピード感は日本にいる時よりも海外にいる時の方が強く感じます。1993年頃から東アジア各地での仕事を始め、何百回と渡航しましたが、少し前まで暗かったストリートが次に訪れた時にはLEDボードが林立し未来的になっていたり、行く度に変化しています。福岡はその意味ではスローですね。

急激で周囲と調和しない変化は好ましくない

最近では、ビルの外壁の素材にLEDを取り入れ、映像を映せるようになり、コンクリートの映像を映せばコンクリートのビルに、木の映像を映せば木造ビルに見えるような「メディアファサード」というものがあります。これは、照明、映像、デザイン、サインの境界が曖昧になってきつつあることを示す例でもあり、屋外広告物審議会でもそれらの線引きや、与える影響についての考察が追いついていません。

最近はこのメディアファサードを中国でよく見かけるようになりましたが、当地ではガイドラインもないことから急速に普及しつつあります。照明分野以外でも、家に電話が無かった人が携帯電話を持ったり、白黒TVを知らない家庭にプラズマTVが現れたりするような急激な進化(ラピッドプログレス)が見られる中国ですが、これらはコツコツと積み上げられ

た文化ではないので中間が無く、照明で言えば暗かった街があつという間に上海のような光の洪水になっています。こうしたことが福岡ではあつてはならないと強く思います。

デザイナーとして制約ばかりすることは好きではありませんが、美しいということは調和が取れているということだと思いますので、昼間の景観、緑、自然の色、建物壁面の素材等と調和してはじめて夜間の景観もあるのだ、と思いますね。

リアルに見せることで市民は理解できる

福岡の人は福岡のことが大好きで、かつ、新しい物好きですよ。イベントが開催されたり建物が建ったりするとパッと飛びつき、もっとこうなればいいなと希望を募らせます。これは「何かリアルなモノを見せないと、理解が進まない」ということだとも思うのです。

今般、博多駅前広場やはかた駅前通りの照明をデザインしましたが、新しくチャレンジしようとする内容をモックアップなど作って示しても、計画段階では後ろ向きの意見も少し頂きました。しかし、実際に整備された後に訪れてみると、人気があり結構褒められました。こうした事は福岡ではよくあつて、本当にリアルに見せることができれば市民は理解できるのです。後ろ向きの意見を出すのも“分からないから”であつて、ケーススタディをいっぱい作り市民が目にしやすくすれば、いろいろと理解も得やすくなるのではないのでしょうか。

福岡のメリットをきちんと情報発信しよう

東京在住のデザイナーに、なぜ東京ではなく福岡で仕事をするのか疑問を呈されることがあります。確かに仕事は東京の方が多いでしょうが、福岡は東京に比べて渋滞も少ないし、同じ金額であれば広い理想の家に住め、美味しい物を食べられますと答えます。そうした良い面

がある一方で、アジアの玄関口と謳う割にはホスピタリティが低いですし、その他いろいろと負の面を隠しつつ郷土自慢しているような両面性があるように感じています。

東京の人に「福岡から来た」と言うともまるで海外から来たかのように「遠くから大変ですね」とよく言われますが、実際は東京・福岡間の飛行機の便数が多く、都外から何時間もかけて通勤する方より早く約束の場所に着くんですよね。また、上海に出張するのに羽田発の飛行機がなかなか取れずに困るという話も聞きますが、「福岡からなら便数も多いし、時間もすぐ着くよ」とアドバイスしたりもしています。どちらの話も、福岡にはメリットがあるのに、情報発信がきちんと届いていないことを示す例だと思いませんか。

市民の美意識を高め、綺麗な都市を作ろう

私は主人と共に都市景観づくりに携わっていますが、「まだまだ福岡は汚いし、景観は酷いし、何年頑張っても一向に変わらない」とよく話します。ある福岡都心の家電量販店の壁面広告など、私達が景観アドバイザー会議で何度も苦言を呈しても、法律では無いので規制が効かず、あっという間にまちの景観を壊しました。古くからある地区の景観や親水空間は整備されず、私達が頑張っても綺麗にならないのなら、諦めて他所へ引っ越そうかと言いたくなるくらい、専門家としては歯がゆく思うのです。

ただ、いろんな策を講じてもそれだけでは綺麗になりません。やはりそこに住む人がどうしたら綺麗になるか、見えるかを努力すべきなのです。ドイツでは外を通る人に向けて窓際に花を置いたりしますね、こうした事は人の気持ちの問題ですし、まず自分の家からそうした雰囲気を作ろうと思わなければなかなか難しいですね。ガイドラインに沿って作られた街区でも、10年も経つと勝手に壁面や屋根を好きな色に

塗り替えてしまうような美意識の低さがあると思うのですが、この美意識をどう高めるかは今後の大きなビジョンのひとつになると考えます。

先程話したように、リアルに良いものを見せれば市民は理解できるのです。良いものを作ることを奨励したり、それを尊重して皆が真似をしやすいように助成したりすることが必要です。その一つの例として、さまざまな展示会をどんどん誘致し、市民が気楽にそこを訪れているいろいろな良さを体感し、小さな事でも体験したり勉強したりできるようなコンベンションシティを目指したらどうでしょうか。そうすればお金もあまりかからず、市民も自らの生活にいろいろと良い事を取り入れやすくなると思います。

行政は多様性や柔軟性のある施策展開を

最近、オフィス近くのマンション3棟の照明設計を手掛け、3棟の真ん中の公開空地にビオトープができました。公開空地で誰でも立入可能ですが、住人の安全のために入りにくい夜間景観を施しました。結局、住人以外はほとんど入りません。購入された富裕層の人は体験し理解できるのに、そうでない人は体験できず理解できないのでは矛盾を感じます。良い事はこのまちに住んでいる人はすべて体験できるべきで、それは行政の責任でしょう。公園を作るにしても、緊急避難や安全性に配慮した公園ばかりではなく、ビオトープのように身近な自然から良い事を学べるような公園もあっていいはずです。そうした面では、物件を売って利益を出すために、努力して良いものを整備する民間デベロッパーの取り組みを、行政も手本にしていいと思います。

また、アイランドシティ街区の照明を手掛けた際は、演色性に留意しました。太陽の下ではものを正しい色で見ることができず、人工

照明では色が良く見えないということがあります。まちの安全性を高める上でそのズレが少なくなる光源の導入を提案したのです。しかし、行政の方はランニングコストやストックを気にかけ、説得するのに骨が折れました。まさに前例主義、管理社会の一例ですが、もっと柔軟に良いものは取り入れてほしいし、と言って良いと聞いたら全て一気に替えるのではなく、評価を見ながら福岡独自のオリジナリティを整えていく必要があると強く思います。

ホスピタリティの積み重ねで海辺を綺麗に

福岡は海に面した都市ですが、海に背を向けているように感じますね。他都市にはもっと海辺にホスピタリティがあります。工業施設があるのは仕方ないとしても、そこに「ようこそ福岡へ」という想いを伝えるデザインはできるはずです。私が昔シアトルに住んでいた際、カナダのビクトリアという都市に船で遊びに行きましたが、そこでは船が入ると海辺の芝生広場に近隣のホテルの従業員等が皆出てきて、船の着岸までの間に歌や踊りで歓迎の意を表していました。小さな例かもしれませんが、多くの人が海から福岡を訪れるのですから、こうしたホスピタリティが必要かもしれません。

先般、志賀島に渡る橋の照明を手掛けましたが、海から見るとキラキラ青く光って見えるようにしました。これも海から福岡に来た際の目印にしてほしい、という想いからそうしたのです。こうした小さな事から水辺を綺麗に変えていけばいいと思うのです。

福岡の夜に皆が関心を持ってほしい

当然の事ですが、昼と夜は半分です。私は夜のまちづくりをしているので「昼と反対側の半分にももう少し力を入れて」と行政にも訴えかけていますが、冒頭に話した『福岡市都市環境照明ガイドライン』は全くアップデートされて

いません。予算が無いとのことですが、こんな状態だと20年後が心配ですね。マニュアルやガイドラインは全ての分野である程度必要だと思っております。

照明に対する意識は、柳川市や熊本の山都町、天草市の方が福岡よりも高いですね。天草市長は40代と若いからか照明にも関心が高く、夜間景観を改善しないと夜の滞在、即ち観光消費が増えない、と一所懸命に取り組まれています。

少し話は変わりますが、福岡市内のある工場から施設をライトアップしたいという相談を受けたことがあります。その工場は福岡の魅力向上に役立ちたいと自ら思って相談に来られたのですが、見積もった費用が高額ということで結局断念されました。こうした自ら「まちのためにやりたい!」と手を挙げる人に何らかの支援をする行政であってほしいですね。また、そうした支援が担当する人によって変わるようなものではなく、方向性やシステムとしてはきちんと固まったものであってほしいとも思います。

私は「御供所・冷泉ライトアップウォーク」の実行委員長と総合プロデューサーに就いています。福岡市民が夜と関わる機会を増やし、この夜の祭りを成熟させたいと思っています。祭りの品格を保つため、露店は歴史や伝統工芸に関わる業態だけにしたり、日頃は立ち入れない神社仏閣で宝物を見たり、良質な音楽に触れたり、そして綺麗な灯りを楽しんだりできる、100年続く魅力ある祭りに育っていくといいなと思って力を傾注しています。

最後になりますが、行政の方も市民の皆さんにも、もっと福岡の夜に関心を持ってほしいと思います。関心が高まれば、よい方向に向かいやすくなると思いますから。

インタビュー日:2011/8/5 文責:URC 白浜